

(上)試合前には、HIV/エイズの予防を訴える劇が行われた
 (下)イベントには、ガーナで活動する青年海外協力隊員も手助けに駆け付けた



「でも、ただ試合を見せるだけでなく、現地の人々や地域に貢献できるようなことを併せて実施したかった」と言う中西さん。そこで、アフリカに知見があり、同社の趣旨に賛同し力を貸してくれるパートナーとして、JICAと連携することに。若者を中心にHIV/エイズの感染が拡大しているガーナで、ラジオ放送や演劇を通じて予防・啓発活動を行う、JICAの「マスメディアを通じたエイズ教育プロジェクト」との共同プロジェクトが実現した。

「私たちの社会貢献活動は、多くの社員に参加してもらうことが基本。そのため2カ月に一度、外部から講師を招いてCSR(企業の社会的責任)フォーラムを開いています。世界が今どんな問題を抱えているのか、多くの社員に知ってもらいたい。そして、社員一人ひとりが持つ専門性が、問題の解決に生かされればと願っています」とCSR部統括部長の富田秀実さんは語る。

その考え方は、同社のボランティア休暇制度にも表れている。この制度で、すでに30人以上の社員が青年海外協力隊として活動してきた。彼らは国際協力の現場で2年間の貴重な経験を積み、一回り大きくなって職場に復帰する。

ソニーでは今回の経験を生かし、6月からのFIFAワールドカップ南アフリカ大会開催中にも、JICAや国連開発計画(UNDP)とともにガーナとカメルーンで同様のイベントを開く予定だ。また、子どもたち1万5000人をスタジアムへ招待し、現地NGOとの協働でHIV/エイズの啓発活動も行う。これら後押ししようと、全世界の社員による募金活動も始まっている。

「ミレニアム開発目標に掲げられたHIV/エイズなどの問題はグローバルに広がっており、特に途上国では深刻です。多国籍企業でもあるソニーが、そうした問題に無関心であってはならないのです」

富田さんの言葉は、独自の技術と豊富な人材を、明るく平和な未来づくりに提供していきたいという、ソニーの熱い意気込みを物語っている。



PLAYERS

国際協力の担い手たち

ソニー株式会社

“JICA and Sony For the Next Generation in Ghana 2009”と名付けられた今回のイベント。現地NGOとの協力のもと、開催前には宣伝パレードが実施された



HIV/エイズを予防し、サッカーで夢と希望を

世界を舞台にビジネスを展開するソニー。グローバルな視点で、社会貢献活動にも積極的に取り組む。ガーナで実施されたサッカーのパブリック・ビューイングもその一つだ。

夢と健康の「コラボレーション」

野外の広場に集まるたくさんの人々。最前列に陣取った子どもたちが、200インチの大型スクリーンを食い入るように見つめている。上映されている映像は、白熱するサッカーの試合※。有名選手の表情がアップになるたび、大きな歓声が上がっている。2009年6月から7月にかけて、ソニー株式会社とJICAと手を組んでガーナで実施した、パブリック・ビューイングでのひとコマだ。

「選手の名前を知っていても、顔を見るのは初めてという子も多いんです。ものすごい熱狂ぶりでした」。そう話すのは、イベントの発案者の一人、ソニー・クリエティブセンターの中西吉洋さんだ。ガーナのテレビ普及率はわずか21%。それも都市部に集中している。地方では、ナショナルチームの試合があってもほとんどの人が観戦できない。「屋外でも使えるプロジェクターや大型映像装置、音響機器などソニーの機材と技術を使って、アフリカの人たちにサッカーの感動を伝えたい」。イベントは、彼らのそんな願いが原点となった。



(上)パブリック・ビューイングの野外会場で、機材の調整をするソニーのスタッフ
 (下)ガーナ代表が出場する試合を、食い入るように見つめる